

岐阜県徳山村の口承文芸に関する調査報告（第Ⅶ報）

——山手・櫛原のわらべうた——

高木靖弘・小川悦子

An Interim Report on the Oral Literature of Tokuyama Mura, Gifu Prefecture (VII)

—— The WARABEUTA in Yamate・Hazewara ——

Yasuhiro Takagi and Etsuko Ogawa

We have investigated on the oral literature, wishing the creation of culture for the sound development of children. In this paper we report on the WARABEUTA in Yamate and Hazewara, Tokuyama Mura.

はじめに

ここに報告する「岐阜県徳山村の口承文芸に関する調査報告（第Ⅶ報）——山手・櫛原のわらべうた——」は、同標題第Ⅰ報（本学紀要第五集所載）、第Ⅲ報（同第六集所載）、第Ⅵ報（同第七集所載）につづくものである。

今回の調査では、揖斐川本流東谷沿いの山手、櫛原の二つの地区に入ることが出来た。私どものこの調査の基礎資料となっている「岐阜大学教育学部郷土資料（5）岐阜県のわらべうた今昔、徳山村篇（昭和49年3月発行）」では、徳山村八地区、すなわち、本郷・上開田・下開田、戸入、門入、山手、櫛原、塚の内、本郷、戸入、門入、山手の四地区しか調査の手が及んでいなかった。未踏の地、櫛原に、私どもが今回、調査に入ることが出来たのは、こうした意味でも大いに意義あることと考える。しかしこれとは別に、今回山手地区へ入ってみてわかったのであるが、前記岐阜大学の調査より8年を経過した今回の調査では、8年前の演唱者5名のうち、3名が既に故人となられていた。こうした調査では、その意味でも、更に未踏の地、塚、上開田、下開田の調査が急がなければならない。

今回の調査は、8月9日、10日、更に9月13日の3日間に亘り、山手、櫛原の二地区において、計24曲のわらべうたを採集することが出来た。

4年目を迎えたこの調査も、今回の調査で得た資料を含めて、合計62曲に達した。したがって、中間的整理の意味で、この稿の終りにまとめて表にした。

I

〈調査地域及び、期日〉

岐阜県揖斐郡徳山村山手

堀田よしえ氏宅にて

1981年8月9日 午後4:00～7:00

〃 9月13日 午後4:30～6:30

岐阜県揖斐郡徳山村櫛原

清水ふさの氏宅にて

1981年8月10日 午前9:30～11:30

〃 9月13日 午後3:00～4:00

〈演唱者について〉

新たな地区へ入り、演唱者を探すのは、大きな困難を伴なった。昨年から準備をして、手づるを求めて、二・三の人にもお会いしたが、ほとんど採集することは出来なかった。今回、本郷の江口幸司氏に、現地まで御案内頂き、山手において、堀田よしえ、小西やすのお二人、櫛原において、清水ふさの氏というすぐれた演唱者を紹介して頂き、多くのわらべうたを採集することが出来た。

今回の三人の演唱者は、山手、櫛原と、それぞれの土地に生れ、成人し、生活を営み現在に至っている。他地区の同年代の女性がそうであった様に、三人とも、若い頃、14、5才より20才頃までは、冬の間、10月下旬より翌年5月初旬まで、都市部の繊維労働者として働きに出る、いわゆる八十八夜工の経験をもっている。現在山手の堀田さん、小西さんは、農耕生活にいそしみ、櫛原の清水さんは、本郷にある中学校の寮の寮母として子ども達の世話にあたっている。

以下に、3人の演唱者の生年月日のみを記す。

堀田よしえ（山手） 1909年（明治42年）4月27日

小西やす（山手） 1912年（明治45年）2月12日

清水ふさの（櫛原） 1911年（明治44年）7月15日

II

〈山手のわらべうた〉

39. こっから見えるは（てまり唄）

演唱者 堀田よしえ

No.39



こっから見えるはなごややないか なごやこどもは

じゅんじょの こども ななつやつからべにおし ろいで
 ぼんの そとへとあそびにでたら おわかい しゅや—
 こわかい しゅりに だきしめられて おちちが いたいで
 はなして おくれ おちち いとてもはなしは できん
 ぼんが くるくる おびかて おくれ あかいが よいか—
 しろいが よいか あかいも いやが— しろいも いやが
 とおせは やりの— は—か た おび はかたお
 び ちよいと ころらで いっ かん わ た い た

(出発実音 = M. M. 126 採譜小川)

歌詞

こっから見えるは名古屋やないか
 名古屋子どもはじゅんじょの子ども
 七つ八つから紅，おしろいで
 ぼんの外へと遊びに出たら
 お若い衆や，小若い衆に抱きしめられて
 お乳が痛いので離しておくれ

お乳が痛^{いと}ても離しはできん
 盆がくるくる帯買っておくれ
 赤いがよいか 白いがよいか
 赤いもいやが 白いもいやが
 当世はやりの 博多帯 博多帯
 ちよいとこころでいっかんわたいた

旋法は、ド、レ、ミ、ソ、ラ、の陽旋法で、核音は、ミ、ラ、である。

この歌は本郷（曲番9）、門入（曲番24）で採集され、さらには後述の櫛原でも、今回採集することが出来た。この四つの歌は同歌で、歌詞も旋律もほとんど違いはない。ことに本郷（曲番9）のものとは、全く同一といってよいほどである。ただし、リズムは他の地区とは異なり、付点音符で歌われるのではなく、八分音符の連続で淡々と歌われていた。

40. げんごろどこいきやる（てまり唄）

演唱者 堀田よしえ

No.40

げんごろ どこいきやる このさぶ ころに さむても つろうても
 ゆかねば ならぬ きよおは ここのか たかいどの よめ
 が ねこを こにーして いたちが はつく はつく
 ねずーみが 三じょうだる さげて うーらの ほそみち つら
 つらと つらつらと ちよいとこころで いっかん わたい た

（出発実音へ、M. M. 126 採譜小川）

歌詞

げんごろどこ行きやる この^{さよ}寒ごろに
^{さよ}寒てもつろうても 行かねばならぬ
 今日九日 たかいどの嫁が
 猫を子にして いたちが*はつく
 はつくねずみが 三升樽さげて
 裏の細道 つらつらと つらつらと
 ちょいところらで いっかんわたいた

※はつく……へばりつくのではないかの説明があったが意味不明

前半は、シ、ド、ミ、ファ、の四つの音からなる陰旋法で、シ、ミ、が核音である。26小節目から調子が変わり、ソ、ラ、ド、レ、の音列の陽旋法に転調しており、いわゆる西洋音楽でいう同主調の関係で転調している。

この歌は、現在までのところ、山手でしか採集されておらず、村内他地区に同歌は見出せない。

41. ここのおとらの (てまり唄)

演唱者 小西やす

No.41

ここのおとらのまえがみは だれがわけたら
 うつくしや きりはごぼんで きりわけて なんとら
 しょうもん しのしも おとらにほーれんものはなく
 ゆうさくるならどちまく
 そっからそろそろてをだせ
 い ほれたが じょうなら ゆさござれ 五十一
 ら いまえ まくらに まどあけて
 ば おやに そろぼん こにそろぼん

五 えん の かね もっ て ほ う ね ん ど お り で か ら も ど り
 か ら も ど り ち ょ い と こ こ ら で いっ か ん わ た い た

(出発実音ニ, M.M. 126 採譜小川)

歌詞

ここのおとらの前髪は 誰が分けたら美しや
 きりよは ごぼんで きり分けて
 なんとらしょうもん しなのしも
 おとらに惚れん者はない
 惚れたが じょうなら *ゆさござれ
 *ゆうさ来るなら どちまくら
 いまえまくらに 窓あけて
 そっからそろそろ手を出せば
 親にそろばん 子にそろばん 五十五円の金持って
 ほうねんどおりで からもどり からもどり
 ちょいと こころでいっかんわたいた
 ※ゆさ, ゆうさ……………夜

旋法は、レ、ミ、ソ、ラ、ド、の音列をもつ陽旋法で、ソが核音である。

この歌は、現在までのところ同村他地区に見出すことはできない。8年前に岐大による調査で、この歌⁽¹⁾が採集されているが、当時の演唱者と今回の演唱者が同一人がどうかは、明らかでない。楽譜上くらべて見ても、ほとんど違いはなく、詞が、字句において少々の違いを指摘出来るほどのものである。例えば、「ゆうさ行くなら」が「ゆうさ来るなら」、「五十五銭」が「五十五円」、「こうねん」が「ほうねん」、など些細な違いである。

福井地方に、類歌と考えられるわらべうたがあるのは興味深い。詞は次の通りである。

「花のおりんの前がみは だれが分けたか美しや これをごはんに切り分けて……………以下略⁽²⁾」

42. ここのおきくは (てまり唄)

演唱者 小西やす

No.42



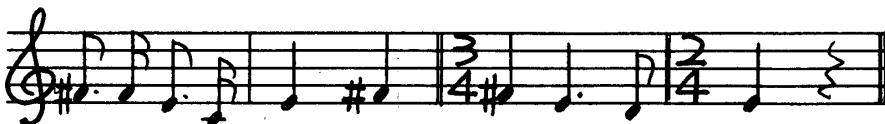
ここのおきくはなぜものくわん
 はらがいたいかなつやみせむか
 はらにねねこのつぼみができ
 うむにやうみづきおろすにやおりず
 もしこの子がおんなのこなら
 こもにまるけておかわにながし
 もしこの子がおとこのこなら
 てらへあずけててならいさせ
 てらのえんからつきおとされ



いたやくちおしゃなむあみだぶつ
 おいしゃにかかるか
 めいしゃにかかるか



おいしゃもめいしゃもーおーなじことおなじことちよいと



こころでいっかんわたいた

(出発実音へ M.M.120 採譜小川)

歌詞

ここのおきくはなぜもの食わん
 腹が痛いか 夏病みせむか
 腹にねねこの つぼみができて
 産むにや産み月 おろすにおりず
 もし この子が女の子なら
 こもにまるけて お川に流し
 もし この子が男の子なら
 寺にあずけて手習いさせて
 寺の縁からつき落されて
 痛や 口惜しや なむあみだぶつ
 お医者にかかるか 眼医者にかかるか
 お医者も眼医者も 同じこと同じこと

ちよいと ころらで いっかんわたいた

旋法は、ミ、ファ、ラ、シ、ド、の陰旋法で、ミとシや核音である。後半12小節は、レ、ミ、ソ、ラ、の陽旋法に転調して終わっている。前述の「げんごろうどこいきやる」と同じ旋法である。この歌は、後述する樋原の同名のわらべうた（曲番59）と同歌であるが、その他の村内では見出されていない。

類歌を探してみると、京都府竹野郡の「向かいのばばさん⁽³⁾」、大阪府河内長野市のやはり「向かいのばばさ⁽⁴⁾」、長野県東筑摩郡の「おらの姉さま⁽⁵⁾」といったところあげられる。参考までに、京都府のものをあげてみる。「向かいのばばさん 縁から見れば……略……腹が病いか夏病みしたか 腹も痛ない夏病みせねど 腹の根つけによい子がござる……略……もしもしょせんも男の子なら 寺へあがらせて手習いさせて……以下略」

43. あったら松や (てまり唄)

演唱者 小西やす, 堀田よしえ

No.43

あ っ た ら ま つ や か ら ま つ や に し が さ い た ら そ の え だ
に き ち ま つ お と こ が す を か け て そ の す を お ろ し に
い っ た な ら あ め が ふ る や ら - き り が ま く や ら - お れ
な ん だ お れ な ん だ ち ょ い と こ ろ ら で い っ か ん わ た い た

(出発実音嬰ハ, M.M.120 採譜小川)

歌詞

あったら松や から松や
西がさいたら その枝に
きちまつ男が 巣をかけて
その巣を落しに行ったなら

雨が降るやら 霧がまくやら
おれなんだ おれなんだ
ちょいと ころらで いっかんわたいた

旋法は、レ、ミ、ソ、ラ、ド、の音列をもつ陽旋法で、ミとラが核音である。

戸入（曲番1）と本郷（曲番17）に同歌が見られる。この歌と、戸入、本郷の歌と比較して見ると、ほとんど差はないが、それでも本郷のものの方が共通性が強い。

44. わしが小さいときや（子守唄）

演唱者 小西やす、堀田よしえ

No.44

わしが ちいさいときゃー おかめと いうたがー
しよの よめーならー ふりそで きーせてー
いまは ななむらしよやーのよめー
すずを もたせてがらーがらーとー

（出発実音ホ、M.M.69 採譜小川）

歌詞

わしが小さい時にゃ おかめと云うたが
今は なな村 庄屋の嫁（小西）

庄屋の嫁なら 振袖させて
鈴を 持たせて ガラガラと（小西）

ねんねしてくりょ 今日二十五日
明日は この子の 誕生日や（堀田）

誕生日なら 何して祝う
あずきぼたもち して祝う（小西）

この子 どの子や 青ばなたれて
わしが親なら かねでやる（小西）

ねんねしてくりょ たけふの与一
竹にもたれて ねんねしよ (小西)
堀田

守はきちがい 泣く子をたたく
たたきゃ よけ泣く よけたたく (小西)

ド、レ、ミ、ソ、ラ、の呂旋法で、核音はドとソである。子守唄らしく流れるような美しいメロディーをもつ歌である。

同歌が、本郷（曲番14）、門入（曲番34）、そして、後述の櫛原（曲番61）で採集されているが、ここ山手では、最も多くの詞が採集出来た。門入を除く三つの地区に共通する詞「ねんねころいち たけやま与一 竹にもたれてねんねしな」（本郷）は、全国的に「天満の与一」として知られる歌の類歌である。

45. じょりかくし (鬼あそび唄)

演唱者 堀田よしえ

No.45

じょりかくしにくねんぼまめんたにいたせりうって
あしもとまんまんじょうりきじょうまんたんこんりきりきちゃん

(出発実音ホ M.M.116 採譜小川)

歌詞

じょりかくしに くねんぼ
まめんたに いたせりうって
あしもとまんまん じょうりきじょうまん
たんこん りきりき ちゃん

旋法は、ミ、ソ、ラ、のテトラコードで、核音はラである。

後出の櫛原（曲番55）と、ここ山手そして、本郷（曲番4、16）のものは、「じょりかくしくねんぼ」型で同歌である。門入のもの（曲番38）は、「おじょりはどこいった」型で同歌とはいえない。

46. おかくかく (子もらいあそび唄)

演唱者 堀田よしえ 小西やす

No.46



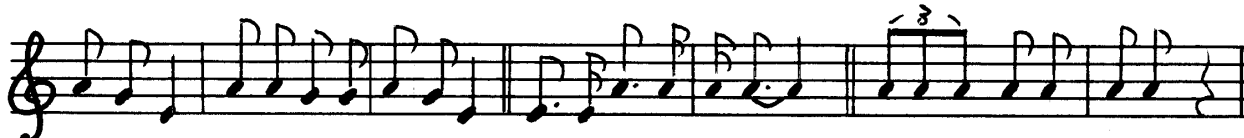
おかくかく だれと いうこを ほしござる やっさと



いうこを ほしござる なにして くわせるあづきにぼたもちさと



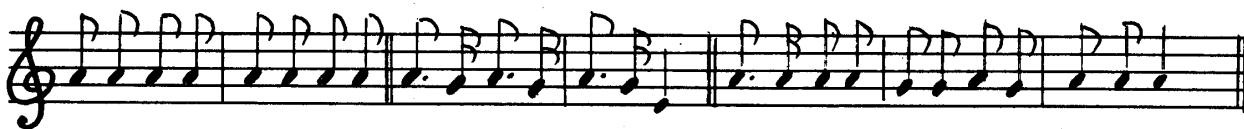
つけて それもし だいどくよ にかい ざしきに とりのかわ



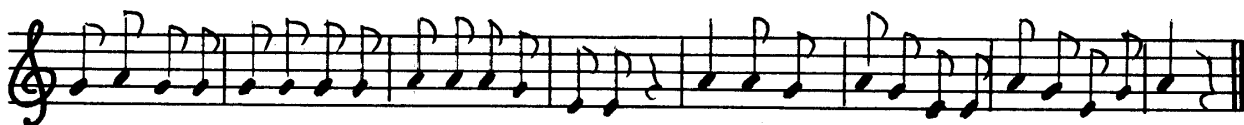
しいて まずまずすえて てがよごれる - みずであらわす



みずはつめたい ゆであらわす - ゆはあつ い ゆいかけ



んにして あらわす それまごはしれ たんすがもちいつ おくる



さんがつ さくらの さくじぶんに ちょうちん とほいて そらそこへ

(出発実音ホ M.M.116 採譜小川)

歌詞

「おかくかく」「だれという子欲しござる」

「やっさという子欲しござる」「何して食わせる」

「あづきにぼたもち砂糖つけて」「それもし大毒よ」

「二階座敷に とりの皮しいてまずまずすえて」「手が汚れる」

「水で洗わす」「水はつめたい」

「湯で洗わす」「湯は熱い」

「ゆい加減にして洗わす」「それまご走れ」

「たんす長持いつ送る」「三月桜の咲くじぶんに」

「ちょうちんとほいて そらそこへ」

旋法は、ミ、ソ、ラ、のテトラコードで、核音はラである。

歌い出しの詞「おかくかく」は「子買う、買う」から変化したものと考えられ、全国的にも「子買お、子買お どの子が欲しや」と歌われるものに類形を見ることが出来る。滋賀県長浜市に全く同歌と思われるわらべうたがあるのは誠に興味深い。

「子買お子買お どの子が欲しや ○○さんが欲しや 連れてって何食わす 二階座敷に虎の皮敷いて まんじゅう三つすえて、手習いさしとこ 手が汚れる 水で洗わす 水はちびたい 湯で洗わす 湯は熱い、そんならよい加減にして洗わそ そりゃ孫走れ……略……お姫さんの長持いつくるな 三月桜の咲く時分⁶⁾」

遊びについてふれておくと、演唱者の説明によれば、最初、買い方一人と売り方多勢とに別れ、歌問答で、買い方が1人ずつ子どもを増やしていくのだそうである。「花いちもんめ」と違うところは、遊びの初めに、ほぼ同人数の二組に別れ、やったりとったりするのと、この「子買お」の様に、1人对多勢から始まるというところにある。

47. ねんねぼうの寺には (子守唄)

演唱者 小西やす

No.47



ねんねぼうのー てーらには	つちうちかねうち	たいこうち
あさからまいろと おもたれど	はかまがのーてー	まいれんで
はかまをかーりに いったなら	あるものないとて	かさなんだ
やーれーはーらー たーちーや	こーもーはらもー	たつものか
あーすはきょうとへ のぼりにて	あさだねみーつぼ	こうてきて
いーえのぐるりに まいといて	うんでーしろめて	ののにして
そーめてくだされ こうやさん	そーめてやるのは	やすけれど
かたにはからうめ からつぼき	すそにはぼたん	にけしのはな

(出発実音ホ, M.M.92 採譜小川)

歌詞

ねんねぼうの寺には つちうちかねうち太鼓うち
朝から参ろと思たれど はかまがのーて参れんで
はかまを借りに行ったなら あるものないとて貸さなんだ
やれ腹たちや こうも腹もたつものか
明日は京都へのぼりにて 麻種三つぼ買って来て
家のぐるりに蒔いといて うんでしろめてののにして

染めて下され紺屋^{こゝや}さん 染めてやるのはやすけれど
肩にはから梅から椿 裾にはぼたんのけしの花,

ミ, ファ, ラ, シ, ドの音列を使った陰旋法で, 核音は, ミとラである。

旋律は違うが, 門入の「ねんねんねりの木」(曲番34)と詞において, 「麻種三つぼ……」以降共通する部分が見られる。また, 川下の隣村, 藤橋村東横山には, 同歌と思われる次の様なわらべうたがある。

「ねんねこぼしのお寺には つちうちかねうち太鼓うち 朝から参ろとおもたけど はかまがのうて参れんで おばさんの所へ借りにいた あるものないとして貸さなんだ あっばらだちはらだちこれほど腹が立つならば 来年今じぶんこのようなら あさ種三粒こうてきて のきのぐるりにふりまいて 麻が三たば生えたなら うんでしろめて布にして ぼんたこうやへあつらえて しろめて下さいこうやどん しろめてやるのはやすけれど かたは何とつけましよう かたはから梅から椿 すずめの小枕こまがえし すそのぬいめは右だたみよの」

48. こんめおした (お手玉唄)

演唱者 堀田よしえ 小西やす

No.48

こんめ おした おみつにおさわ おさわー おさわー

よいつまさんご さきさ わんこ ひよりに とつて ひよりし

ひよりし ひとついしふたつ みつついし よつつ いつついし

むつつ ななづか がに がに のにせやませ ばりばりぎしゃり

だーだに だーだに げんしろ

(出発実音ホ M.M.112 採譜小川)

歌詞

こんめおした おみつにおさわ
 おさわおさわ よいつまさんご さきさわんこ
 ひよりにとって ひよりしひよりし
 一つ石ふたつ 三つ石四つつ 五つ石六つつ
 ななづか がにがに
 のにせやませ ばりばりぎっしゃり
 だーだに だーだに げんしろ………未完

ラ、ド、レ、ミ、の音列をもつ陽旋法で、核音は、ラとレである。

こんめ（お手玉）で遊ぶ時に歌われたものである。門入で採集されたもの（曲番26）と同歌であるが、今回山手では、一応歌って遊んだが、途中までで思い出せなかった。

49. おおさいどりか（手おどり唄）

演唱者 堀田よしえ

No.49

おおさいどりか さいどりか べにやのこが かねこん
 が まくらもとに おいたなら ねずみが こそこそ
 すってら てん かのんどうで ひがくれ て いちのき
 にのき さんのきさくら ごよまつ やなぎ やなぎのうらに
 ゆみーちようひろって おおもり こもり ちやわんのかけ ひろって くるまに
 のして やれひけ だるま それひけ くるま いざや わかいしゅ



はなとれいかまいか はなはなにばな一ぼたんしゃくやく
 つつじばな一ぼんおりやてにもち二ぼんおりやこしにさし三ぼんめに
 ひがくれでからすのやどにとまろうかすずめのやどにとまろうか
 からすのやどはくそくさいすずめのやどはふるくさいとんびのやどにとまて
 あさおきてみればちよのやまべそべそはなのよなじょうろが
 ささいろのおびをまえにしんとむすんでうしろにしんとむすんで
 うまにのつてでよった

（出発実音ニ， M.M.120 採譜小川）

歌詞

おおさいどりかさいどりか
 べにやのこがかねこんが
 枕元においたならねずみがこそこそすってらてん
 かんのん堂で日が暮れて
 一の木 二の木 三の木さくら五葉松 柳
 柳のうらに弓一張ひろって
 おおもりこもり茶碗のかけ拾って車に乗して
 やれひけだるま それひけくるま

いざや若い衆 花とれいこまいか
 花は何花 ぼたん しゃくやく つつじばな
 一本折りゃ手に持ち 二本折りゃ腰にさし三本目に日が暮れて
 からすの宿に泊ろうか すずめの宿に泊ろうか
 からすの宿は糞くさい すずめの宿はふるくさい
 とんびの宿に泊って 朝起きてみれば ちよのやまべそべそ
 花のような女郎が ささ色の帯を 前にしょんと結んで 後にしょんと結んで
 馬に乗って出よった

ラ、ド、レ、ミ、の音列をもった陽旋法で、ラとレが核音である。同歌は、門入（曲番27）でも採集されており、遊びも同じく二人向かい合って、互いの手を左右交互に合わせていく遊びである。

50. おしろのせおにさのせ (てまり唄)

演唱者 小西やす, 堀田よしえ

No.50

おしろの せ おにさの せ おしろの ざいしよでおたきを
 うとて - おねぶりころんで おちゃわん けっからかしていっちよさか どん
 にちよさか どん ここは どん どん どころがみさ - まや ここは
 はこねの ひふう みよ いつのみ やげになになにも - ろた
 いちにゃこうがい ににゃまたが - もじ さんにゃ さしぐししのびの
 ま - くら ごばん かがみ ろくばん あげてしすのおび

しすのおびとはいらんとおっしゃる わたしなわおび

なわだすきなわだすき

(出発実音ホ M.M.120 採譜小川)

歌詞

おしろのせ おにさのせ
 おしろのざいしょで おたきをうとて
 おねぶりころんで お茶わんけっからかして
 一ちょさかどん 二ちょさかどん
 ここは どんどん どろがみ様や
 ここは箱根の ひ、ふう、みい、よ
 いつのみやげに 何々もろうた
 一にゃこうがい 二にゃまたがもじ
 三にゃさしぐし しのびのまくら
 五ばん鏡 六ばん あげてしすの帯
 しすの帯とは いらんとおっしゃる
 私しゃ なわ帯 なわだすき なわだすき

レ、ミ、ソ、ラ、ド、の音列をもった陽旋法で、レ、ラ、が核音である。

この歌は、8年前にも同地区で採集⁽⁸⁾されているが、当時と多少の歌詞の違いが見られる。歌い出しが「おんさのさ おしろのさ」で始まり、「五ばんまめぼし 六ばんかがみ」と異なっている。現在まで、同村他地区ではこの同歌を見出すことは出来ない。

類歌として、旧京都市域の見られるものをあげておく。

「うしろのせ おんさのせ……略……どんどのおうらの どろ神さん きょうは箱根で一や二や三や四 五や六……以下略⁽⁹⁾」

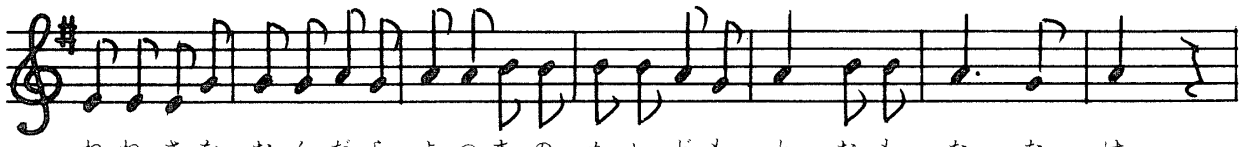
51. すすろすすろ (てまり唄)

演唱者 小西やす 堀田よしえ

No.51



いっ ぱい すすたら おはぐる つ け よ
 おはぐる つけたら くちべに さ せ よ
 くちべに さいたら おしろい は け よ
 おしろい はいたら ねねさを だ け よ
 ねねさを だいたら ねねさを お べ よ



(出発実音ホ M.M.118 採譜小川)

歌詞

すすろすすろ 一杯すすろ
 一杯すすったら おはぐるつけよ
 おはぐるつけたら 口紅つけよ
 口紅つけたら おしろいはけよ
 おしろいはいたら ねねさを抱けよ
 ねねさを抱いたら ねねさをおべよ
 ねねさをおんだら よつまのかいども^{とお}までたたけ
 ひ、ふう、み、よ、い、む、な、や、こ、とお、^{とお}もたたけ

ラ、ド、レ、ミ、の音列をもつ陽旋法で、ラとレが核音である。

同歌は、本郷（曲番19）、門入（曲番37）で採集されている。遊び方も同じで、フレーズ毎の後の休みで、それぞれの動作をするのである。動作は、「すすろ」「お歯黒」「口紅」「おしろい」……の順序であるが、同席の演唱者堀田さんから、「子どもの頃は、そう歌ったが、今考えれば、おしろい→口紅が正しいと思う」と疑問が出された。門入では「おしろい→口紅」の順で歌われているが、本郷、山手、それに後出の櫛原（曲番62）を含めて、「口紅→おしろい」の順で歌われている。

52. かくれんぼにかくれがさ（鬼きめ唄）

演唱者 堀田よしえ

No.52

かくれんぼに かくれがさ うちでの こづち せやすみ はさみ
 おわりやの ちゃやで すっ ほん ほん の ほん

(出発実音ホ M.M.126 採譜小川)

歌詞

かくれんぼに かくれがさ
 うちでのこづち せやすりはさみ
 おわりやのちゃやで すっほんほんのほん

ラ、ド、レ、の三つの音を使ったテトラコード、核音はレである。

同歌は、後出の櫛原でも採集された。(曲番56)しかし、現在まで、この二地区以外では採集されていない。類歌として、三重県度会郡大湊に次のわらべうたが伝わる。

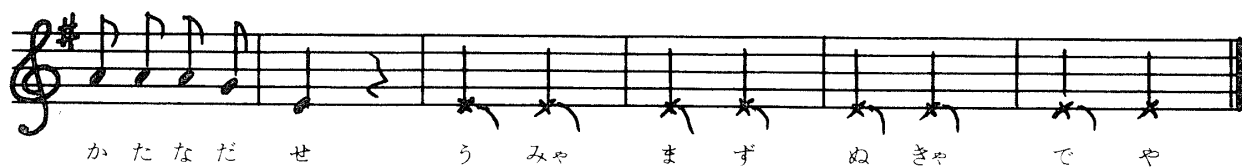
「かくれんぼにかくれがさ、打出の小槌にちよんがらもち、チョイ⁽¹⁰⁾」

53. かくれんぼにかくれがさ（鬼きめ唄）

演唱者 小西やす

No.53

かくれんぼに かくれがさ みのきて かさきて ほっ つい て
 おかどに たつもの なにもん や ほっ か いちど ばけもん
 や やれだせ それだせ あんどだ せ なんどの ちよ から



(出発実音ト M.M.126 採譜小川)

かくれんぼに かくれがさ
 みのきて かさきて 棒ついて
 おかどにたつもの 何もんや
 ぼっか いちど ばけもんや
 やれだせ それだせ なんとだせ
 などの ちょから かたなだせ
 う, みゃ, ま, ず, ぬ, きゃ, で, や,

旋法は、ラ、ド、レ、の三つの音を使ったテトラコードで、ラ、とレに核音をもつ。

前曲52と同じ詞「かくれんぼにかくれがさ」で始まるが、旋律は異なる。そして、詞においても、最初が同じだけで、以降は全然別歌である。歌詞全体の意味は解することが出来ない。しかし、最後の「う、みゃ、ま、……」の部分は、呪文的で、ことのほか鬼きめ唄の特徴を表わしている。この歌は岐大資料にもなく、今回初めて採集された。

〈櫛原のわらべうた〉

54. ここのおばさ (てまり唄)

演唱者 清水ふさの

No.54

こ こ の お ば さ は こ の な い し と で ね こ を こ に 一 し て
 お と ー ら と つ け て お ー と ら ち と こ い ー ち ー ち の ま ー せ
 ち ち の ま せ ち い と い っ か ん わ た い た

(出発実音ト M.M.116 採譜高木)

歌詞

ここのおばさは、子のない人で
 猫を子にして、おとらとつけて
 おとら、ちょと来い、乳のませ、乳のませ
 ちょいと いったんわたいた

ここ蘆原地区で、最初に採集したこの歌は、前述の岐大資料の中にも勿論見出せない。村内他地区にも、今のところ同歌を見出すことは出来ない。私どもも初めて耳にする新しい歌である。

旋法は、レ、ミ、ソ、ラ、ド、の陽施法で、核音はレ、ラ、である。演唱者清水さんの特徴でもある。いわゆるこなし小節が随所に見られ、楽譜の上には書き表わせない、微妙な節まわしがある。

55. じょりかくし（鬼あそび唄）

演唱者 清水ふさの

No.55



じょり がくしに くねん ぼ まめん たに いたしま



うってじょうり き じょうじょう まめ かっ くら まめ に の -



かた ちょうちん ちゃぶ ちゃぶ おざい もん の こむすめ

(出発実音イ M.M.176 採譜高木)

歌詞

じょりがくしにくねんぼ
 まめんたにいたしまうって
 じょうりきじょうじょうまめかっくらまめ
 にのかたちょうちんちゃぶちゃぶ
 おざいもんのこむすめ

旋法は、ラ、ド、レ、の音列を使ったテトラコードで、核音はレであると考えられる。というのも、終りの部分6小節を除いて、それ以前の部分では、レ→ドの進行において、レ→#ドで歌われている。すなわち、レ→#ド→ラの音程が、短2度、長3度のテトラコードは特殊なケース(琉球旋法に見られ

る)で、この場合は、レ→ド→ラの一般的なテトラコードであろうと解されるべきである。終りの部分6小節では、正規のテトラコードに戻っているので、前段部分は、演唱者のくせが、あるいは、歌い出しの音程の不安定さが出たものと考えられる。

詞は、本郷、山手と同様、歌い出し部分が「じょりかくしくねんぼ」型で、同歌と考えられるが、ことばに脈絡がなく、意味不明で、呪文的になっているのも、同様である。

56. かくれんぼにかくれがさ (鬼きめ唄)

演唱者 清水ふさの

No.56



かくれんぼにかくれがさうちでのこづちせやすみはさみ



おわりやのちゃやで すっほんほんのほん

(出発実音口 M.M.100 採譜高木)

歌詞

かくれんぼに かくれがさ
 打出の小づち せやすみはさみ
 おわりやのちゃやで すっほんほんのほん

旋法は、ラ、ド、レ、のテトラコードであるが、前曲同様、歌い出し部分が#ドで歌われている。途中3小節目からは、正規のドに戻っていることから、やはり演唱者のくせが表われていると考えられる。核音はレである。

同歌は、今回山手でも採集された。(曲番52)現在までのところ、同村他地区には見られないが、山一つ越えた福井県大野郡に、同歌と思われるわらべうたがある。

「かっかく かくれがさ 打出の小づち かねのようはし すててこてん⁽¹¹⁾」

蘆原は、越前から徳山へ入る唯一の進入路である東谷川沿いにあり、伝承経路を考える上では極めて興味深い。

この歌は、前述、山手の「かくれがさ」(曲番、52, 53)と同様鬼きめ唄ではあるが、一般的な遊びの鬼きめ唄ではなく、三曲ともかくれんぼを始める時の鬼きめにのみ歌われたとのことである。

57. こっから見えるは (てまり唄)

演唱者 清水ふさの

No.57



こっから見えるはなごやじゃないか なごやの こどもはじんじょの



こども ななつ やつからべにおしろいで ごぼんのそーとへ



あすびに でたら おわかいしゅうやーこわかい しゅうに だきしめ



られて おちち いたいで はなして おくれ おちちが いとても



はなせん からに ぼんが くるやら おびかて おくれ あかいが



よいかーしろいが よいか あかいも いやがーしろいも いやが



とうせん ばやりの -は-かた おーび はかたお び ちいと



いっかん わ たい た

(出発実音変イ M.M.112 採譜高木)

歌詞

こっから見えるは名古屋じゃないか
 名古屋の子どもはじんじょの子ども
 七つ八つから紅おしろいで
 ごぼんの外へ遊びに出たら
 お若い衆や小若い衆に抱きしめられて
 お乳いたいで離しておくれ

お乳がいとても離せんからに
 盆がくるやら帯買っておくれ
 赤いがよいか 白いがよいか
 赤いもいやが 白いもいやが
 とうせんばやりの 博多帯 博多帯
 ちょいとっかんわたいた

旋法は、ド、レ、ミ、ソ、ラ、の陽旋法で、核音はミ、ラ、である。同歌は、門入、本郷、それに今回の山手と数多く見られる。ことに本郷の斉藤みのえ氏の歌ったもの（曲番9）と比較しても、全く、施律、ことばともに同一といってもよい程である。旋律において、楽譜上では多少の違いが見られるものの、これは、清水氏独特の小節をきかした歌い方によるものであり、ことばにおいても、斉藤氏の、①「おまんの里」、②「帯かけおくれ」、③「当世ばやりの」、が清水氏によるとそれぞれ、①「ごぼんの外」、②「帯買っておくれ」、③「とうせんばやりの」、と変っていることが指摘出来るくらいのものである。これとても、耳から聞き覚えることだけということを考えれば、むしろ違いはないとさえいうことが出来る。

58. おかくかくかく （子もらいあそび唄）

演唱者 清水ふさの

No.58

おかく かく かく どのこが ほしや ○○いうこが ほしや

なにくわいて しとねる たいに ほねなし おかおって かましよ

そんでも いやじゃ いちのぜんで よぶわ そんでも いやじゃ

にのぜんで よぶわ そんでも いやじゃ さんのぜんで よぶわ

そんなら やろうか おかおって かましよ

（出発実音不明瞭 M.M.126 採譜高木）

歌詞

「おかくかくかくどの子が欲しや」
 「〇〇いう子が欲しや」
 「何食わいてしとねる」
 「鯛に骨なしおかおってかましょ」
 「そんでもいやじゃ」
 「一の膳でよぶわ」
 「そんでもいやじゃ」
 「二の膳でよぶわ」
 「そんでもいやじゃ」
 「三の膳でよぶわ」
 「そんならやろうかおかおってかましょ」

この歌は、一部分を除いて、音の高低はあるものの、明瞭な音低がなく、全体の旋法を固定することが出来ない。前出山手のもの（曲番46）の類歌であろうが、詞の内容は著しく異なる。遊び方は同様である。

59. ここのおきく（てまり唄）

演唱者 清水ふさの

No.59

ここの おきくはなぜものくわん はらが いたいか
 なつやみ するか はらに ねねこのつぼみが出来て
 うむにゃ うまれずおろすにゃおりず なんと いしゃどの
 おくすり ないか くすり あれどもあわしてないが

やーまのさんしょと せきしょと こうしょと あわして のんだら
 うーま れまーしょ うまれましょ うまれた こ がー
 おとこの こ で たらへのほして がくもん さして
 あたまを すってー ころもんきせて ひがしむいても
 なみあみ だぶつ にしへむいても なむあみ だぶつ
 にーしも ひがしもーごーく らくーじゃ ごくらく じゃ

(出発実音変イ M.M.116 採譜高木)

歌詞

ここのおきくは なぜもんの食わん
 腹が痛いか 夏病みするか
 腹にねねこのつぼみができて
 産むに産まれず 墮ろすにゃ墮りず
 なんと医者どの お薬ないか
 薬あれども 合わしてないが
 山の山椒と*せきしょと*こうしょと
 合わしてのんだら 産まれましょ産まれましょ
 生まれた子が 男の子で
 寺へのほして学問さして
 頭をすって 衣ころもん着せて
 東向いてもなむあみだぶつ

西へ向いてもなむあみだぶつ

西も東も極楽じゃ極楽じゃ

※せきしょとこうしょ……^{せきしょう こうじゆ}石菖と香薷と解したい。山椒と合わせていづれも薬料となり、止血・解熱・利尿・健胃等の薬効がある。

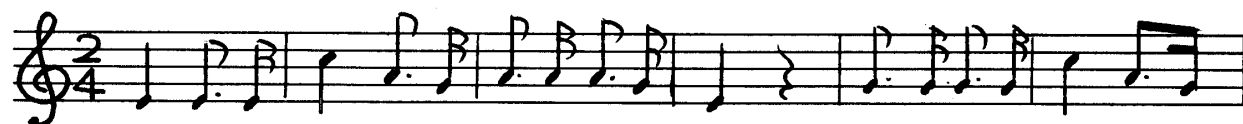
旋法は、レ、ミ、ソ、ラ、ド、の陽旋法で、核音はレ、ラ、である。ただし、途中10小節の間、四度高く転調し、その後また元調に戻って終る。

今回山手で採集された同名「このおきく」（曲番42）と比較してみると、前半の詞四節目までは、全く同歌と考えられるが、それ以降は、少なからず違ってきている。さらに後段にいたっては、本郷の「でんでんたたくは」（曲番3、15）の詞が混入してきている。

60. おおさいどりか （手おどり唄）

演唱者 清水ふさの

No.60



おおさいどりかさいどりかべにわのこんがー



かねこんがまくらもとにおいたればねずみが



こそこそすってらてんかんのんどうまにひがくれて



いちのきにのきさんのきさくらのごよまつやなぎのやなぎの



もとにゆみいっちょひろっておおもりこもりちやわんのかけを



くるまにのしてそらひけだるまそらひけだるま

（出発実音ト M.M.132 採譜高木）

歌詞

おおさいどりか さいどりか
 べにわのこんが かねこんが
 まくらもとにおいたれば ねずみがこそこそすってらてん
 かののんどうまに 日が暮れて
 一の木 二の木 三の木桜 五葉松 柳
 柳のもとに 弓一ちょう拾って
 おおもり こもり 茶碗のかけを 車い乗して
 そらひけだるま そらひけだるま

レ, ミ, ソ, ラ, ド, の陽旋法で, 核音はミとラである。

同歌が, 門入(曲番27), 山手(曲番49)で見られるが, それぞれに見られる後段部分「いざや若い衆, 花折り行こか……以下略」が, ここでは欠落している。戸入(曲番2)では逆に前段部分が欠落していたが, ここでは後段部分の欠落と, 誠に興味深い。演唱者の清水さんに再三確認したが, 後段部分は「知らない, ここまでじゃった」と断言された。

61. ねんねこのいち (子守唄)

演唱者 清水ふさの

No.61

♩ = ♩
 ねんね このいちー たけやま よいちー たけに
 もたれてー ねんねんー しょー ねんねんしてー おーきたら
 あかいまんに ととつけて ねんねんぼうのー てーらには ちちうちかねうち
 たいこうち はかまが のうて まいれんで はかまをかりに いったらば



あるものないー かさなんだ はらたち や はらたちや

（出発実音変ロ M.M.63 採譜高木）

歌詞

ねんねこのいち たけやまよいち
 竹にもたれて ねんねんしょ
 ねんねんして起きたら あかいまんまにととつけて
 ねんねん坊の寺には ちちうち かねうち 太鼓うち
 はかまがのうて まいれんで
 はかまを借りに行ったらば
 あるものないと 貸さなんだ
 腹たちや 腹たちや

前段部分は、ド、レ、ミ、ソ、ラ、の陽旋法で、後段部分は、ミ、ファ、ラ、シ、ド、の陰旋法で歌われており、西洋音楽でいうところの同主調の関係で転調している。

この歌は、二つの歌が連続して歌われていると考えるのが妥当である。ちなみに、山手では、同歌が、別々の独立した歌（曲番、44と47）として採集されたし、本郷でも前段部分が独立した歌（曲番14）として採集された。山手や、本郷では、その前段部分だけが、いろいろな詞でくり返し歌われている。また、門入（曲番34）に見られる如く、この前段部分のさらに前に、別の歌がついて歌われる例も見られる。こうしたことから、子守りという労働の中で、いろいろな子守唄をつづけて歌ううちに、それが習い性となってしまう、二つの歌が一つにつながってしまうということは想像に難くない。そう考えれば、同主調の関係での転調ということも、当然と、うなずけることである。

62. すすれすすれ一杯すすれ （てまり唄）

演唱者 清水ふさの

No.62



すす れーすすれ いっぱい す す れ いっ ぱい



すすたらおはぐるっ けよ おはぐるっけたらくちべに



さ せ よ く ち べ に さ い た ら お し ろ い は け よ
 お し ろ い は い た ら ね ね さ を お べ よ ね ね さ を
 お ン だ ら よ つ ま の か ど に と 一 ま で た た け
 ひ ふ み よ い つ む な な や こ こ と 一 お

(出発実音ト M.M.120 採譜高木)

歌詞

すすれすすれ 一杯すすれ
 一杯すすたら おはぐろつけよ
 おはぐろつけたら 口紅させよ
 口紅さいたら おしろいはけよ
 おしろいはいたら ねねさをおべよ
 ねねさをおんだら よつまのかどに ^{とお}一まで たたけ
 ひ、ふ、み、よ、いつ、む、な、や、ここ、と一お

旋法は、ラ、ド、レ、ミ、ソ、の陽旋法で、核音は、ラ、レ、である。

本郷（曲番19）、門入（曲番37）、山手（曲番51）と同歌が見られるが、門入の歌にくらべると、本郷、山手同様欠落部分が見られる。それに、ここ櫛原でも、「口紅→おしろい」の順で歌われており、結局、東谷川沿いの本郷、山手、櫛原では、門入と逆ということになる。伝承ということを考える上で、誠に興味深いことである。

III

〈わらべうたの伝承について〉

伝承とは、時を超えて次代へ受けついでいくことであるが、地域から地域への伝承（正確には伝播というべきかも知れないが）を、ここではとり上げてみることにする。

今回の調査地域である山手と櫛原は、約3kmの距離をへだてた隣同志の位置にある。そして、徳山

村の中心地本郷と、山手とのへだたりも約2kmと、極めて近い位置関係にある。こうした位置関係は、本郷と、西谷川沿いの戸入、門入との16kmという様なへだたりとは異なり、子どもの足でも容易に交流することが出来る距離にある。現に、演唱者からの話を聞く中に、櫛原と山手、山手と本郷と交流出来たことを伺い知ることが出来た。春と夏の「おまわり」は、村人や子ども達にとっては最も楽しみな年中行事の一つで、隣村までもついて行ったとのことである。その他にも、この東谷沿いの地区には、交流の機会が多くあった様である。こうしたことからいっても、山手、櫛原の両地区に、共通するわらべうたが多く存在することは、何ら不思議なことではなく、当然考えられることである。

右に掲げる表1は、徳山における同歌の分布状況を表にしたものである。現在までに採集した62曲について、一地区にのみ存在するものを除き、二ヶ所以上の地区に共通するものをあげ、表にした。

これによると、最も共通する同歌が多く存在するのは、やはり、同じ谷川沿いに隣接する山手と櫛原である。今回、櫛原で採集した10曲（曲番61「ねんねん坊の寺には」を、前半、後半と分けて2曲と数えて）のうち、9曲までが、山手でも採集され

表1 徳山村における同歌分布状況

題名	地区名	本郷	山手	櫛原	戸入	門入
じょりかくし（くねんぼ型）		4.16	45	55		
かくれんぼにかくれがさ			52	56		
こっから見えるは		9	39	57		24
おかくかく			46	58		
ここのおきく			42	59		
おおさいどりか			49	60	2 (後半)	27
ねんねこのいち		14	44	61 (前半)		34
すすれすすれ		19	51	62		37
あったら松や		17	43		1	
ねんねん坊の寺には			47	61 (後半)		
こんめおした			48			26
わしんうしろの		10				36

数字はいずれも曲番号

ている。共通する歌の題名を列記すれば「じょりかくし」「かくれんぼにかくれがさ」「こっから見えるは」「おかくかく」「ここのおきく」「おおさいどりか」「ねんねこのいち」「すすれすすれ」「ねんねん坊の寺には」の9曲である。さらに、この二地区と本郷とをくらべてみると、「じょりかくし」「こっから見えるは」「ねんねこのいち」「すすれすすれ」の4曲が共通している。さらに注目すべきは、門入地区と、山手、櫛原地区との間に共通する歌を少なからず見出すことが出来る事実である。「こっから見えるは」（門入では、てんてんてんまる、で歌い出す）「おおさいどりか」「ねんねこのいち」「すすれすすれ」の4曲を数える。

本郷、山手、櫛原の三地区は前述したとおり、東谷川沿いの比較的近い距離の位置関係にある。しかし、西谷川沿いの一番奥の門入と、山手、櫛原とは、本郷を経由した経路しか考えられず、直接の交流があったとは考えられない。こうしたところに、共通するわらべうたが存在するという事は、私どもの現調査段階では、想像をはるかに超えるものであって、不思議という他はない。ちなみに櫛原の演唱者清水ふさのさんの言によると、生れてこのかた70余年、一度も門入の地に足を踏み入れたことはないとのことである。

戸入と、他地区と比較してみると、「あったら松やから松や」が山手と、「おおさいどりか」の後半部分「いざや若い衆」が、門入、山手、櫛原に見られる様に、共通するわらべうたが極めて少ない。これは、戸入での採集わらべうたの絶対量の不足もあるが、その他のもの「とんとんとぶさ」「みやの前から」等を見ても、戸入は、他の地区とは少なからず傾向が違う様に思われる。戸入について、そのように結論づけるには早計に過ぎるが、その点は今後の調査に待ちたい。

ま と め

今回の調査でも、優れた演唱者にめぐまれ計24曲ものわらべうたを採集することが出来た。そして、今回の様に隣接した地域の同時調査で、多くの同歌を採集できたのも、大きな成果である。今後、分布の問題を考える上で、示唆に富むものであると考える。

こうした中で、次のことを、私どもの今後の課題に加えたい。

その第一には、残された地域、下開田、上開田、塚の三地区の調査を早急に進めなければならないということである。私どもがこの調査を始めて以来4年、すでに亡くなられた演唱者も少なくない。

第二には、表1の空白を埋める様な、目的意識的な第二段階の調査を、合わせて進めていかなければならないということである。

第三には、第二に関連して、戸入地区における資料収集をさらに進めること、これは、言語的に戸入だけが、他の7地区と違うといわれているが、それが、わらべうたの面でもいえるかどうかということを確認することである。

第四に、進入経路と考えられるところの、福井県南部地方及び、滋賀県北部地方の調査が必要となってきた。

以上の成果と、課題の上になつて、さらにこの研究を深めていきたいと考える。

おわりに、今回の調査にあたって、現地を御案内頂き、演唱者への紹介の労をとって頂いた本郷在住の江口幸司氏には、深く感謝する次第である。また、演唱者の堀田よしえ氏、小西やす氏、そして、清水ふさの氏には、ここにあらためて深大なる謝意を表する次第である。

表2 徳山村採集わらべうた一覧

曲番	題 名	分 類	採集地	採集年月日	演 唱 者	所 載
1	あったら松やから松や	て ま り 唄	戸 入	1978・9・14	山 本 花 枝	第I報(第5集)
2	いざや若い衆	手 お どり 唄	戸 入	"	山 本 花 枝	"
3	でんでんたたくは	て ま り 唄	本 郷	1978・9・15	北 村 つ まま	"
4	じょりかくし	鬼 あ そ び 唄	本 郷	"	北 村 つ まま	"
5	れんげの花と桜の花と	て ま り 唄	本 郷	"	北 村 つ まま	"
6	てんまりやてんまりや	て ま り 唄	本 郷	1979・8・8	斉 藤 み の え	第III報(第6集)
7	向こうの山に光るは何や	て ま ま り 唄	本 郷	"	斉 藤 ひ ろ え	"
8	たしかにたしかに	て ま ま り 唄	本 郷	"	斉藤みのえ・江口いと	"
9	こっから見えるは	て ま ま り 唄	本 郷	"	斉 藤 み の え	"
10	わしんうしろの	て ま ま り 唄	本 郷	"	斉 藤 み の え	"
11	れんげの花と桜の花と	て ま り 唄	本 郷	"	斉 藤 み の え	"
12	おおなみこなみ	縄 あ そ び 唄	本 郷	"	北 村 秀 子	"
13	ぜんまいわらび	鬼 あ そ び 唄	本 郷	"	江 口 い と	"
14	ねんねんころいち	子 守 唄	本 郷	"	斉 藤 み の え	"
15	でんでんたたくは	て ま り 唄	本 郷	"	斉 藤 み の え	"
16	じょりかくし	鬼 あ そ び 唄	本 郷	"	斉藤みのえ・斉藤ひろえ	"

17	あったら松やから松や	て ま り 唄	本郷	〃	齊藤	み の え	〃
18	かいかいでまる	て ま り 唄	本郷	〃	齊藤	み の え	〃
19	すすれすすれ一杯すすれ	て ま り 唄	本郷	〃	齊藤	み の え	〃
20	とんとんとべさは	て ま り 唄	戸入	1979・8・9	増山	たず子・山本花枝	〃
21	みやの前から	て ま り 唄	戸入	〃	増山	たず子・山本花枝	〃
22	いっちょうめのぶんど	て ま り 唄	戸入	〃	増山	山 た ず 子	〃
23	はじった	お は じ り き	戸門	〃	増山	山 た ず 子	〃
24	てんてんてんまる	て ま り 唄	戸門	1979・8・9	清生	した・清生八重子	第VII報(第7集)
25	たけの子が出だす	て ま り 唄	戸門	1979・11・23	清生	八重子	〃
26	こんめおした	お 手 玉	戸門	1979・8・9	清生	しな・清生八重子	〃
27	おおさいどりかい	手 お どり	戸門	1979・11・23	清生	八重子・治良右エ門	〃
28	かあかあ勘三郎	手 鬼 お き め	戸門	〃	清生	八重子	〃
21	びんびんここのつ	鬼 き き め	戸門	〃	清生	八重子	〃
30	ひとりふたりはいめの子	鬼 き き め	戸門	〃	清生	八重子	〃
31	なかのなかの小坊主	鬼 あ そ び	戸門	〃	清生	八重子	〃
32	坊さん坊さんどこいくな	鬼 あ そ び	戸門	〃	清生	八重子	〃
33	ちんこばあらば	鬼 片 足 と 守 び	戸門	〃	清生	八重子・治良右エ門	〃
34	ねんねんねりの木	子 子 守	戸門	〃	清生	八重子	〃
35	ことしはじめて	子 子 守	戸門	〃	清生	八重子	〃
36	うらのうらの	て ま り 唄	戸門	〃	清生	八重子	〃
37	すらすら一杯すすろ	て ま り 唄	戸門	〃	清生	八重子	〃
38	じょりかくし	鬼 あ そ び	戸門	〃	清生	八重子	〃
39	こっから見えるは	鬼 つ ま り 唄	山手	1981・8・9	堀田	よしえ	第VII報(第8集)
40	げんごろどこいきやる	て ま り 唄	山手	〃	堀田	よしえ	〃
41	ここのおとらの	て ま り 唄	山手	〃	小西	や す	〃
42	ここのおきくは	て ま り 唄	山手	〃	小西	や す	〃
43	あったら松やから松や	て ま り 唄	山手	〃	小西	や す・堀田よしえ	〃
44	わしが小さいときや	子 守 唄	山手	〃	小西	や す・堀田よしえ	〃
45	じょりかくし	鬼 あ そ び	山手	〃	堀田	よしえ	〃
46	おかくかく	子 も ら い あ そ び	山手	〃	堀田	よしえ	〃
47	ねんねんぼうの寺には	子 守 唄	山手	〃	小西	や す	〃
48	こんめおした	お 手 玉	山手	〃	堀田	よしえ・小西よしえ	〃
49	おおさいどりか	手 お どり	山手	〃	堀田	よしえ	〃
50	おしろのせおにさのせ	て ま り 唄	山手	1981・9・13	小西	や す・堀田よしえ	〃
51	すすろすすろ一杯すすろ	て ま り 唄	山手	〃	小西	や す・堀田よしえ	〃
52	かくれんぼにかくれがさ	鬼 き め	山手	〃	堀田	よしえ	〃
53	かくれんぼにかくれがさ	鬼 き め	山手	〃	小西	や す	〃
54	ここのおばさ	て ま り 唄	榎原	1981・8・10	清水	ふ さ の	〃
55	じょりかくし	鬼 あ そ び	榎原	〃	清水	ふ さ の	〃
56	かくれんぼにかくれがさ	鬼 き め	榎原	〃	清水	ふ さ の	〃
57	こっから見えるは	て ま り 唄	榎原	〃	清水	ふ さ の	〃
58	おかくかくかく	子 も ら い あ そ び	榎原	〃	清水	ふ さ の	〃
59	ここのおきく	て ま り 唄	榎原	〃	清水	ふ さ の	〃
60	おおさいどりか	手 お どり	榎原	〃	清水	ふ さ の	〃
61	ねんねんこのいち	子 子 守	榎原	〃	清水	ふ さ の	〃
62	すすれすすれ一杯すすれ	て ま り 唄	榎原	〃	清水	ふ さ の	〃

注

- (1) 岐阜大学教育学部編郷土資料(5)岐阜県のわらべうた今昔, 徳山村篇 p.60, 楽譜No.14
- (2) 未来社刊, 日本の民話12 加賀・能登・若狭, 越前篇, 杉原丈夫他編, p.592
- (3) 柳原書店刊, 日本のわらべうた全集15, 京都のわらべうた, 高橋美智子著, p.71
- (4) 同上, 日本のわらべうた全集16, 大阪のわらべうた, 右田伊佐雄著 p.73
- (5) 未来社刊, 日本の民話10, 信濃, 越中篇「信濃の民話」編集委員会他編, p.206
- (6) 社会思想社刊, 尾原昭夫編著, 日本のわらべうた, 戸外遊戯編, p.155
- (7) 岐阜大学教育学部編郷土資料(3)岐阜県のわらべうた今昔, p.133 No.94.
- (8) 同上(5) p.64 楽譜No.24
- (9) 柳原書店刊, 日本のわらべうた全集15, 京都のわらべうた, 高橋美智子編 p.125
- (10) 社会思想社刊, 尾原昭夫編著, 日本のわらべうた, 戸外遊戯編 p.59
- (11) 未来社刊, 日本の民話12, 加賀・能登・若狭・越前篇, 杉原丈夫他編 p.352.

(1981. 10. 12. 受理)